

# 坂町 道德作文 コンクール 特選作品

生きる

坂中学校1年

松浦 くらら

(横浜東二丁目)

あなたは「地球ってどんなものだと思う?」と、尋ねられたとする。なんて答えるのかな。私はどう答えたらいいのかわからない。大きい。心の中にぼんぼんとその言葉が浮かんだ。そう、地球は大きい。その考えが大切だと思う。

生きる。私は今、生きている。お母さんのおなかの中から70億分の1の可能性で生まれ、元気の産声をあげ、今こうして生きている。「私」という存在がこの世に生まれ、周りの人は私に對してどう思ったのだろう。嬉

しいという感情や悲しいという感情。私の誕生のときもあったのかな。

私という存在って何なのだろう。大きな地球の中になった一人。私という存在がある。そして、その存在は一人しかない。これって大切な世界の一人ということだと思ふ。

当たり前前の日常。学校や家庭で過ごしていると「うまくいった」「成功した」そう思える時がある。それは、感情があり、生きているからだ。どんなに辛いことでも生きているから感じている。人は、一人ひとり考え方や思いは違っても、感情を持つている。それは、自分が生きているからだ。何かうまくいかなかったり家族とけんかしたりした時、よく人はこう言う。「自分なんか生まれてこない」「いなくてもいい存在なんだ」と考えたことがたくさんあった。だけど、一昨年の7月に起こった「西日本豪雨災害」という災害から改めて「生きる」ということを考えることが

できた。私の生まれ育った、坂町。坂町の小屋浦地区・坂地区では、大きな被害を受けた。人の心にも、傷を負わせた。多くの人の命と、心をうばった、この災害。誰もが心に残るとても大きな災害となった。でも、私は「坂町のために出来ることはしたい」そう考えるようになって。そして、坂町の人である私が自分らしく生きる。「坂町を笑顔にしたい」と思うように

進んでいる。私はこの身近であった「西日本豪雨災害」という災害から自分が生きていることで誰かの支えになり「生きる意味のない人間なんていない」ということを考えることが出来るようになった。私が今ここで伝えたいこと。それは、あなたにも私にもみんなにも「生きる意味」があるということ。「誰かのために生きる」そう考えることも大切だし、「自分の人生は自分で歩む」そう考えることも良いことだと私は思う。ただ、あなたには「生きる意味のない人間なんていない」それを忘れ

てほしくない。最後に「生」の反対。「死」を考えたい。「死」を辞書で引いてみると「命がなくなる、活動していない、役に立たない」と書かれているのだ。「私」という存在がない。「死」とは、人の役に立てない。そして、生きていないということ。つまり、みんなには会えないし、みんなに忘れられる。逆に考えると、私は全員「死」があるからこそ、未来に向かって一日一日を誰かの役に立とうと今一生懸命生きようとしているのだ。いつ誰がどこで死ぬかは誰も分からない。だけれど、もし自分が今、命を落としたとしても「生きて良かった」と思え、周囲にそう思われるような人生を私は送りたい。つまり人には生きる意味があるから今ある一つの大切な命を大事にすることが「生きる」ということだと思ふ。そして、みんなには自分の意味を失わず、未来へ向かって生きてほしい。

職場体験学習で

学んだこと

坂中学校2年

尾崎 ほのか

(坂東三丁目)

私は、総合の授業で職場体験学習に行きました。事業所先は坂町役場でした。私は、役場の方々の仕事は、一日中パソコンに向き合っていたり、会議ばかりだと思っていました。よく考えてみると詳しいことはよく知らなかったので体験してみたいと思いました。

私がお世話になった課では、外に出ることが多く、予想とは違いくぐく驚きました。何をやるんだらうと疑問ばかりでした。まず、初めて体験したのは「道路パトロール」です。道路パトロールでは、道路にゴミが落ちていないか、道路に亀裂が入っていないか、階段が傾いていないかなどを見ます。異常が見つかったら、場所がよく分かるように色々な背景を入れながら写真を撮ります。そうすることで、直すときにもどこがどんな状態かが分かりやすくなります。他にも、道路が陥没していたら、

## 11月の思い出

坂中学校3年

月待 絹

(坂東二丁目)

りなど気遣いの心を教わりました。そして、適当に置くのではなく、丁寧にわかりやすく置いて相手が使いやすいものも仕事のひとつなんだと思いました。私はこれらの体験をして「働く」という意味が自分の中で変わりました。今までは、お金のためだったり、生活のためだけに働くのかなと思っていました。が、町民の安全を守るためや生活をしやすいするための取り組みを考えたり行ったりすること「働く」という意味なんだと思えました。誰かのためにする仕事はすごく大変だと思えました。

私はこうして誰かのためにすることや、誰かのために丁寧に物事をする事は、今から自分にできることだと思えました。例えば、トイレのスリッパをそろえたり、崩れている本を直したりなどが挙げられます。このようなことは、自分の将来にもつながると思うので、習慣にしていきたいと思います。



自分たちでコンクリートで埋めていてすごいなと思いました。私は業者の人が直しているのだろうと思っていたので驚きました。自分たちでやれることは全てする役場の方は、素晴らしいなと思いました。

昨年冬、私は左足首の靭帯を損傷してしまい、初めて松葉杖をつけて生活することになりました。普段通りに歩くことができないという事は、とても不便なことで、精神的にも肉体的にもつらかったです。しかし、そのつらさをやわらげてくれるものがありました。それは、私の周りの人々の様々な言動でした。

「大丈夫?」  
「大変そうじゃね。何かできることがあったら言ってね。」

私がしてから初めて学校へ行った日、たくさんのクラスメイトや先生方が私に心配の声をかけてくれました。

優しい行動をとってくれ、とても嬉しかったです。そして、これこそが「思いやり」のある行動なんだと感じました。

「けがしてるけえって、人にばっかり持ってもらうのは違うんじゃない?」  
と言いました。その言葉で私は「ハッ」としました。確かに私は、けがをしているからといって、自分でできることまで人に甘えて助けてもらっていました。その言葉は、けが人にとっては少し厳しい言葉かもしれませんが、しかし、けがを理由に自分勝手に人に甘えていた私に、その行動は間違っているということ、優しい言葉がけや手助けをしてくれた人たちに感謝しなければいけないということに気付かせてくれました。この厳しい言葉も「思いやり」の一種なんだと感じました。



優しさと厳しき、種類の異なる二つの「思いやり」は、どちらも受け取る側にとって大事な意味を持っています。しかし、「思いやり」を発信する側の人、受け取る側の人、状況や気持ちを考えて、優しくしたり、厳しくしたりするのは、「思いやり」ではなく「自己満足」になってしまいます。相手は本当に困っているのか、何を必要としているのか、考えをしないか、少しでも相手のことを考えて行動できれば、それは立派な「思いやり」になると思えます。